

Title	「子どもの育ちと絵本 2：声の森からことばへ」（聖学院大学総合研究所（子どもの人格形成と絵本）研究プロジェクト：子どもの育ちと絵本研修会）
Author(s)	寺崎, 恵子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.2, 2013.12 : 26-29
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5025
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研修会 「子どもの育ちと絵本2 ―声の森からことばへ―」

2013年7月25日（木）聖学院大学エルピスホールにて「子どもの育ちと絵本2―声の森からことばへ」と題した絵本研修会が開催された。ブックスタート期にある子どもの育ちについて、保護者や絵本に関心をもつ大人たちが共に学びあうことを目的として、上尾市教育委員会（読書活動推進センター）、聖学院大学総合図書館、そして当研究会の共催で企画、実施されたものである。

上尾市立図書館長より開会のあいさつをいただいた後、二つの講演が行われた。講演Ⅰは、阿久戸光晴（聖学院理事長・院長・大学学長）が、「子どもの心にそっと寄り添う―お母さんたちへのメッセージ―」と題して、また、講演Ⅱは、「絵本に遊びが生まれるとき」と題して、寺崎恵子（聖学院大学人間福祉学部児童学科）がつとめた。講演後、大学図書館の利用案内を、聖学院大学総合図書館課長 菊池美紀がつとめた。以下、講演の内容を紹介する。

講演Ⅰ

子どもの心にそっと寄り添う ―お母さんたちへのメッセージ―

昨年3月に福島県内の被災地で、絵本の読み聞かせをおこなった。東日本大震災は、存在基盤や信頼構造を揺るがす地底からの打撃と、愛の連帯を断裂させる津波という横からの打撃、そして、将来への展望を不安にさせる放射能という上からの打撃という3次元方向からの脅威である。この脅威を乗り越えることは、人類史上初めての課題であるといえる。このことを今、私たちは認識する必要がある。

被災地を訪ねて、幼い子どもも大人も表情が険しいことに気づいた。屋外での遊びが制限され、常に風向きを気にせざるをえず、あたりまえの暮らしが立ち行かないことへの不安は大きなもので

あった。この大不安を乗り越えるには、ブジャ・デ体験つまり、デジャ・ヴ（déjà vu）・既視感を逆さにすることが必要である。見慣れている光景に新たな角度から光を当てることで、新しいビジョンが見出されるという心の体験である。この体験において、絵本は、最良の教材である。

まず、レオ・レオニ（作・絵）、谷川俊太郎（訳）『フレデリック』（好学社1969年）を挙げる。この作品は、本当に蓄えておくべきものは何か、と、わたしたち読者に問いかけてくる。



阿久戸光晴理事長・院長・大学学長

野ねずみたちは、灰色の季節・冬に備えて食料を蓄えはじめたが、フレデリックだけが働かない。仲間にも問われた彼は、太陽の光と世界中の色、そして言葉を集めている、と答えた。やがて冬になり、蓄えた食料も尽き、野ねずみたちは、おしゃべりをする元気も失った。そこで、彼が蓄えたものを仲間たちが味わい始める。目を閉じて、太陽の光を思い出してあたたかさを感じ、身のまわりにあった物を思い出して世界の色を感じ、そして、春夏秋冬の暮らしの情景を思い出して、言葉を感じた。

衣食住の必要を満たすだけではなく、心を照らしてあたためる光や希望の色をもつ豊かな文化、そして人々を幸せにする言葉を蓄えることの必要

性を、この作品は伝えている。

次に、ピーター・レイノルズ（作・絵）、谷川俊太郎（訳）『てん』（あすなろ書房 2004年）を挙げる。希望を回復し将来への展望が子どもにひらかれる様子をこの作品は表している。

主人公のワシテは、自分には絵に表現できるものは何もないと思っていた。「しるしをつけてごらん」という先生の助言に、ワシテはたった一つの点を白紙に描いた。そして「サインして」と先生に求められて自分の名を入れた。その作品を先生は金色の額縁に収めた。ワシテは、もっと「てん」を描きたくなり、色とりどりの、さまざまな大きさの点を描いた。こうして、作品「てん」は展覧会に出展された。ワシテの作品に感嘆するある子ども、実は自信がない。ワシテは、先生と同様に「やってみてごらん」「サインして」と助言した。助言に触発されたその子どもは、自らの表現を生み出した。

子どもが自信をもって自分を表現するとき、寄り添う人がそこにいる。その人の一言が子どものなかで希望の光となる。理解あるその一言は他にも伝播していく。理解（understand）は、下に立って苦勞を分かちあうことに始まる。

第三に、愛の連帯にビジョンが生じてくることを、レオ・レオニ（作・絵）、谷川俊太郎（訳）『スイミー 小さなかしこいさかなのはなし』（好学社 1986年）に確認したい。

大きな魚の脅威に曝されて散り散りになった小さな魚たちは、孤独と悲しみに暮れていた。身近なものたちの生活世界にふれて、生きることの不思議を感じた小さな魚スイミーは、元気を取り戻しつつあった。ある日、スイミーは、怯えて泳げなくなっている小さな魚たちに、皆で一緒に大きな魚の形になって泳ぐことを提案する。魚たちは、それぞれが自分の持ち場を守りながら一体となって悠然と泳ぐことができた。

愛の連帯である絆に、共生への将来構想が生起する。幼い子ども家族の一員であり、社会の一員である。怯えてこもる孤立から一員としての参加に

変わるきっかけが絆づくりにある。

第四に、しざわさよこ、先天性四肢障害児父母の会、田畑精一、野辺明子（共同制作）『さっちゃん のまほうのて』（偕成社 1985年）を挙げる。

右手に障害をもつさちこは、幼稚園でのままごとでお母さん役になりたいと思っていた。けれども、友だちに、指のないお母さんは変だ、と言われて、さちこは登園しなくなった。自身について母から話を聞いたさちこは、お母さんになれないと心配して思い悩む。生まれたばかりの弟に会った日の帰り道、さちこは父に心配ごとを打ち明ける。父は、さちこの手が不思議な力をもつ「まほうのて」であると伝える。その翌日から、さちこは誇りをもって幼稚園で過ごすようになった。

子どもの自尊心は、身近な人の言葉で傷つけられることもある。けれども、痛みを分かち合って寄り添う人の言葉は、子どもに立ち直りを起こす魔法の言葉である。自尊心を育む、生きる言葉を、この作品は励ましと共に伝えてくる。

第五に挙げるのは、こんのひとみ（作）、いもとようこ（絵）『くまのこうちょうせんせい』（金の星社 2004年）である。絵本は、短い言葉と絵を用いて、現実の奥にある豊かな世界とビジョンを伝えてくる。

校長先生は、大きな声であいさつすることを子どもたちに求めている。ひつじくんは大きな声をだすことができない。なぜなら、大声は家族の喧嘩の声や怒鳴り声であり、彼を悲しくさせる、怖いものだからだ。ところが、校長先生は、病気のために声がでなくなった。子どもたちの手紙に励まされて学校に復帰したが、校長先生は小さな声のままだった。ある日、ひつじくと山に登ったとき、事件が起こる。校長先生が山の上で倒れたのだ。助けを求める大きな声がひつじくんから自然にでた。大声を避けていたひつじくんは、自分の大きな声に生きがいを見出し、校長先生の小さな声を伝える役目をもつようになった。

苦しみや悲しみを抱く弱い人が、共に寄り添い、

互いに深く理解しあう。そこに信頼関係が醸成され、生き方の展望がひらかれる。

困難や苦難を乗り越えていくビジョン力のある良い絵本を、大人が選び、子どもと共に楽しむことが肝要である。見慣れた世界の奥に隠されていることを、絵本を読みあうというブジャ・デ体験に見出したい。

講演Ⅱ

絵本にあそびが生まれるとき

扉を開いてページをめくる、めくる、めくる。本の仕組みに誘われて、閉じる・開く、見えなくなる・見えたと繰り返す。「いないいないばあ」のような遊びが絵本に生まれてくる。

瀬田貞二は、『幼い子の文学』（中央公論新社 1980年）のなかで、物語に「行って帰る」型があることを明らかにした。こちらからあちらへ、既知の世界から未知の世界へ移っていく。これまでは見えなかったあちらのことを見てから、必ずこちらに戻ってくる。いつもの世界から少しずれて、いつもの自分のあり方が揺さぶられ、本来の自分に立ち返る。「行って帰る」型は、子どもの遊びにも見ることができる。

長谷川摂子（作）、ふりやなな（絵）『めっきらもっきら どおんどん』（福音館書店 1990年）は、絵本の構造も内容も遊びになることを見事に表現した作品である。主人公のかんたは、意味の通じないうたを歌って、こちらとあちらの境界である隙間（木の洞）から未知の世界（根元）にずり落ちた。あちらの世界で不思議に出会い、存分に遊ぶ。ところが、ふと母の声を想うとき、彼は帰ることへと揺り起こされる。こちらの世界は、親しみ深い、母の「抱」の世界であり、自己の基点（起点・帰点）になる。子どもは、その確からしさに安心して十分に遊ぶ。絵本は、自明性の根元に降りて再びこちらに帰るといふ、揺れ・振りの遊びの場になる。



寺崎恵子准教授

幼い子と共に楽しむ絵本には擬音語や擬態語の多用がみられるので、ことばの音遊びになる。その面白さを、後路好章『絵本から擬音語 擬態語 ちぶちぼーん』（アリス館 2005年）が説いている。ところで、「擬」は、なぞらえるわざ、いつもの自分を他所に少しずらして真似ること、他者のふりをすることである。擬音語や擬態語は、遊び心を誘発する。ふだんの生活でなんとなく感じていることをことば（音）に重ねてみると、面白さが生まれてくる。三宮真由子（作）、みねおみつ（絵）『でんしゃはうたう』（福音館書店 2009年）は、電車に乗っているときに身体に感じることを「だだっ」と「ん」「たたっつっつっつ」に表している。声にしてページをめくっていると、電車に乗っているときの、あの感じがここにありありと再現されているように感じられる。「ガタンゴトン」より迫真性がある。そして、「電車の音は【ガタンゴトン】である」といういつもの意味の思い込みから解放されて、快い。

幼い子のことば（喃語を含む）は、大人のことばとは異なる質をもっている。たとえば、「ニャンニャン」は、ねこの鳴き声の擬声語であり、その鳴き声をもつ動物「ねこ」を意味することばとして理解されることが多い。ところが、岡本夏木『子どもとことば』（岩波書店 1982年）によれば、ある子どもにとっての「ニャンニャン」は、「ねこ」

に限られない。「四足の動物」、「白い」、「ほわほわとしているもの」、「触っていると心地よい」等が複合しているのである。幼い子のことば（声）は、ふだんの生活のなかで子どもが全身で感じていることの表現であり、表情である。確定的な意味をもつことばになっていないので、「なんとなく」でしかわからない。身近な親しい人と子どもとの間で、互いの声を交わして重ねあい、表情を共有しあう。声や表情のやりとりは「擬」の共遊である。「融合的（癒合的）社会性」（H.ワロン）、つまり、自己と他者が共に参加して一体感をもっている状態に近い。いつもの自明な意味の根元に潜んでいることを全身で感受して、子どもと大人が交わりあう遊びにあるとき、そこに「ニャンニャン」が生成する。共遊における感受性がことば（声・表情）になってくる。それが擬音語や擬態語であろう。

そこで、絵本の共有活動において感受性を豊かに育むために、ことばの明確な意味の伝達よりも、ことばの表情を面白さとして共有して交わりあう遊びを考えたい。たとえば、金関寿夫（文）、元永定正（絵）『カニ ツンツン』（福音館書店 2001年）が挙げられる。「カニツンツン ビイ ツンツン…」は、実は、鳥のさえずりを表すアイヌ語である。声に出して読み、図を見ているうちに、ことばの奥に潜んでいた生き生きとした雰囲気や気分が、詩（うた）のことばとそのかたちになって、今ここに表れてくるように感じる。このような共有・共遊は、谷川俊太郎（作）、元永定正（絵）『もこもこ』（文研出版 1977年）にも起こる。「もこ」のことばと図は、その地（「しーん」）に潜勢している、意味とかたちになる前の、無声の間や明暗・濃淡が融合する色調にもとづいて生まれてくる。子どもと一緒に参与して、「つん」に指と声がふれて、ページをめくって「ぼろり」に指と声がふれるとき、解けるような笑いに面白さを共有する。ことば（声）やかたち（図）の表情にふれて、その根元に潜んでいる未分化な意味やかたちを感じるとき、そのなんとなくの感触に生まれてくるこ

とばやかたちを、共に感じあう遊びになる。

絵本は、大人が子どものために読み聞かせるものというよりも、両者が参加してふれあう共遊の場である。語り手と聞き手に分かれた二者がかかわりあうところというよりも、むしろ、子どもと親しい人とが一緒になって融合する「抱」の遊び場になる。自明な意味からずれて、ことばやかたちの根元に降りてみると、そこは、感受性の豊かな、いつもの意味が声や色に解けている擬音語や擬態語の世界である。子どもと一緒に声を発して、一緒にふれて、交わりあう。その感触の快さが面白さとなって、生き生きとしたことばの意味やかたち、そして表情になってくることを、共に感じあうのである。おそらく、かがくいひろし（作）『だるまさんが』（プロンズ新社 2007年）の人気は、共に揺れ、共にふれる共遊の快さにあるのだろう。「遊びは人生の鏡である」とフレーベルが述べたように、絵本にあそびが生まれるとき、そこには、子どもに添い立つ大人の生き方が映っている。



（文責：寺崎恵子〔てらさき・けいこ〕 聖学院大学
人間福祉学部児童学科准教授）